

報時教改



號九十七第

目次

社説

時事偶感◎武士道.....

論説

佛教界の二大要件(承前).....
個人に於ける宗教の價值.....

録

獨乙よたり.....
佛敎辯士の評判(五).....

.....
.....

信界

雜成二則.....

今昔

本間氏事跡略考.....

社會

◎西印度の慘事◎分捕事件の無罪◎工場法案の立案成る◎淺草婦人會大會◎敎界彙報◎紛々録

大日本佛敎徒同盟會綱領

- 一、佛敎本家の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛敎の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛敎護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を奨励し、其學徳を高らしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認敎制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛敎の精神に基ける諸種の教育特に普通敎育女子教育を奨励して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、敎界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を奨励する事。
- 十二、佛敎の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報

時事偶感

願ふに道義の敗類それ今日より甚しきはなからむ、賄賂行はれ、苞苴行はれ、詐欺行はれ、強盜行はれ、恐喝取財行はれ、あらゆる不倫不義悉く行はれざるはなし、吾人は教育界といはず、政治界といはず、宗教界といはず凡てを通じて濁流混々として地にはびこるの感なくはならず。

現時の官公吏なるものは古武士に比すべきものならむ、然るに何ぞや統計の示す所明に年を逐ふて犯罪増加するの傾向あり、人の比較的清廉潔白を以て許せし官吏にして尙然り、况や其他をや、假令法律上等等の制裁を受けざるにもせよ、過失を生ずることあらば、徒に其地位に戀々たらずして断然冠をかくるの覺悟を有せざるべからず、頃者教育社會の物議を惹起せし、敎科書事件の如き失態の甚しきもの也、風俗壤亂を以て新聞紙の小記事に干渉する政府は何を以て天下に謝せんとするか、而して當局者も宜しく其責任を明にせざるべからず、曖昧の中に葬了するが如きは決して職務に忠實なるものといふべからず。

政界の汚濁に至りて一層其甚しきをみる、而して今は中央の都會より却て地方に推移したるが如し、仙臺市名古屋市の

社論

政教時報第七十八號目次

- 勞働問題……………(文士有馬祐政)
- 佛敎界の二大要件……………(藤野野矢)
- 還俗論……………(藤野野矢)
- 選舉民に望む……………(藤野野矢)
- 神宮敎復活運動◎基督教徒の選舉運動◎佛敎徒は眠れり◎選舉法の厲行◎敎界彙報◎紛々録……………(文士K下生)
- 獨乙たより……………(自稱辯士)
- 佛敎辯士の評判(四)……………(齋藤唯信)
- 佛敎は近きに求めよ……………(菊池秀言)
- 本問氏事跡略考……………(菊池秀言)

本誌廣告

本誌は毎月二回(二日、十五日)發行とす
 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
 本誌代金は必ず小爲替にて逕送の事但し郵券代用の場合は五厘切手にて一割増の事
 本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳圓五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢
 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 二、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛敎徒同盟會出版部」とせらるべし

發行所 大日本佛敎徒同盟會出版部
 東京市本郷森川町一番地
 印刷 百目木智雄
 明徳三十五年五月十四日印刷
 明徳三十五年五月十五日發行

如き最近の一例なり、何れの地方と雖、土木事業、堤防改築、道路修繕等の起る毎に多少の醜弊を發せざるなし、一般の人民が賄賂は必ず、贈るべきもの又取るべきものとの傾を生し來りぬ、此に至りて市町村の自治制紊亂せざらむとするも豈得べしや、監督の任にあたる地方長官たるもの其職を嚴守し、不正の行爲をなすあらば少しも假借する所なく其罪を糾さざるべからず、愛知縣知事は今回の出來事に付て其責を負ふて辭表を提出せりと傳ふ、果して然らば眞に責任を明にするもの、吾人の聊か壯快とする所なり。

殊に宗門の時局に當るものは其出處進退を明白にせざるべからず、私黨を結びて權力爭奪の渦中に投ずることあらば、何を以てか彼紛々たる政黨者流と選ぶ所あらんや、其結果遂に人心乖離、信徒の同情を失ひ不歸依を蒙るや、炳乎として、明けし、近來宗門に紛擾の絶ゆる所以、當局者其責なしといふべしや、局に當るもの宜しく三思して可也。

武士道

近來、著述または演説に盛に武士道を鼓吹し、之によりて社會の腐敗汚濁を一掃し、たえず動搖を來しつゝある現在道徳の根柢を確立せむとするものあり、吾人は、我國現時の道義か武士道に負ふ所尠少なからざるは常に認むる所なれども、武士道を以て直に現代思想の範疇たらしめ由りて以て道徳の基礎を定めんとするは、今日の趨勢上尙に無益の業たるに過

ざるを信ず、吾人の武士道に採るべきもの別に理の存するあり、乃ち責任を重んずること、是なり。

弱肉強食の戦國時代にありて社會の綱紀弛み秩序紊れ四面暗黒界裡にありて、赫々たる一道の光輝を放つものは、一言の然諾を重んずる美風これ也、詳言すれば水火の難に臨むも、從容自若、能く其責任を盡し、獻身的行動を全うしたるにあり、これより主従の關係より馴致したる結果ならんも、掠奪呑噬、私慾を恣にする戰國の世にありては、異彩を添えたりといふべし、殊に廉耻を重んずるの一事に至りては、武士道の真髓此中に存するが如し、渴しても盜泉の水を飲まずとは、彼等の理想とし、且つ實行したる金科玉條の語なり、此崇高なる廉耻を尊ぶの思想ありて、始めて義を見て動き、其責を果すに於ては、如何なる白刃の頂上に閃くも敢て辭せざるなり。

徳川氏三百年の昇平をみるに及で、驕奢の風爰に發生し、長袖寛袴、綺羅を飾り徒に空威張を事とし、人民を輕侮するに至りぬ、かくして士氣既に衰へたりと雖、多年の習慣慣力によりて僅に一縷の命脈を持続するに至れり、彼の人口に嘖々として賞揚措かざる、四十七士の如きは、澆季の世稀に見る所なり、人をして千歳の下、尚凛として生氣あるを覺せしむ、實に武士道の好龍鑑、好模範たるを失はず、不俱戴天之仇敵とは云ひながら、慈母に訣れ、妻子を棄て、臥薪嘗炭、備に苦楚を極め、遂に主君の爲に其誓を復したるは、能く臣下たる責任を盡したるものといふべし、吾人の武士道に倣つ所以のもの何ぞ他あらむや。敢て武士道論を作る。

佛敎界の二大要件(承前)

有馬祐政

第一要件、教育事業の完成

日本一般の教育事業が猶未だ不備なる點もあり、又不可なる處もありて、非議も尠からず駁論も聞、あるは必なるが、隨つて由來之れを標準とし模範とせる佛敎界の教育事業に缺點難處多きことは言ふを俟たざる次第にして、特に余の深く遺憾とするところのものは

- (一) 形式に拘はること、
- (二) 雜駁に流るること、
- (三) 學究に陥むること、

(一)については、徒らに建築の壯大なるを以て快と爲し、學科の高尚なるを以て上と爲し、規則の整頓せるを以て可と爲し、更に敎師の名位あるを以て榮と爲すが如きの類にして、此くの如きは、實に現今日本全國の教育界においても概ね免れざるどころの弊風とす、余輩は餘りに形式的たり餘りに規則的なる一般教育の風潮を以て教育の本志を貫徹するに於いて、却りて障害あることを認定する者なるが、特に最も内容を重んじ、精神を貴び、且又活用を尚び、實學を撰ぶべき宗

敎教育に在りては、大いに意を致して、其等の弊害を掃去せざるべからず、就中、一言すべきは、敎師の聘用にあり。若し其の人の信念、其の人の品行を慮らずして、唯漫然名聲あり學位あり學職あることのみ使るときは、假令其の一科についてのみ敎授は其の成績見るに足るものあらんも、其のいはゆる宗教教育に對しては、實に何等格別の利益なきのみならず、小にしては、宗教上に必要なる其の科の一一の關係を粗略にし、大にしては、宗教に反對なる思想を浸潤せしむるに至ることあるべきなり。蓋し是れ信念なき者、若くは品行悪しき者は、決して宗教教育上の注意と感化とを興ふるの資格なければなり。

(二)は、主として學科の多岐に至りて統一なきことを謂ふものにして、動もすれば、普通學校よりも幾層倍亂雜に流れ各科の間に統一なきのみならず、一科一科についても、其れ自身の統一なく、特に前にも述べたる通りに、各科と宗教との關係をさへ説明せざるに至りては、實に言語道斷といはざるべからず。唯單に一週數時間の宗乘餘乘を加へたりといふを以て満足するものならんか、是れ其實は普通學校の雜駁なるが上に雜駁の度を増したるものに外ならずして、余は斷じて此くの如きを以て宗教學校と稱呼すべきものにあらざると爲し、隨つて寧ろ其の廢滅するを以て當然の事なりと言ふ者なり。

(三)は、最も排除すべき大切なる事件にして、而も實に目下多くの宗教學校が罹るところの病患なるが如し、現に其の

卒業者に接し、又其の報告類を閲するも、布敎傳道の方面に向はずして、濫りに學究に耽り穿鑿に勞する者、其の數誠に少からざるを覺ゆ。即ち談論的なる者多くして、信仰的なる者極めて稀なるの現象あり、而も其の談論は敢て教理の開顯敎風の振興といふよりも、却りて讀む者をして疑惑を懷しめ、甚だしきは異義を挾ましむるに至り、決して此等の所說に依りて、佛敎に對して敬愛なる信仰の念を喚起せらるゝが如きことあらず。彼等は全然佛敎の傳道師にあらずして、佛學の研究者たるのみ。佛學の發揮者にあらずして、佛敎の議論者のみ。果して然らば宗教教育の目的を去ること既に業に遠く、宗教學校としての面目も亦失墜せるに幾きものと謂ふべきにあらずや。

苟くも教育事業の完成を欲する以上は、余輩は先づ此等の三大弊を一洗すべきことを主張す。其の改正の方法としては、(一)に對しては、飽くまでも精神を重んじ實用を努むべく、且つ敎師を執るは、敢て名位などに頓着なく、成るべく其の宗に因縁ある者を以て先きとすべきこと。(二)に對しては、學科の宗教の開顯傳播に必要なるもののみを撰び、繁簡宜しきに適はしめ、且つ佛敎を中心として、都て統一的に敎授すべきこと。(三)に對しては、甚だ大切なるだけに、又甚だ困難なる問題あれば、十分銳意熱心に矯正せざるべからず。即ち眞正なる宗教家を養成するの本領を、敎職員が擧りて常に念頭に銘記して、智識と信仰との圓滿なる領得を致さしめ、而も能く活動の才能を修練すべきこと等を、余は最も切要とす。

るものと信するあり。
 以上はこれ教育事業の完成に對する教授上の改良即ち消極的方法ともいふべきものなるが、余は更に進んで其の他の方面たる積極的方法に論及せんと欲す。積極的方法とは何ぞや。一言に約すれば宗教學校系統の完備是れなりとす。

現今佛教各宗における學校系統は、一律を以て目すべからず、或は小學教育をも授くることあり、或は高等豫備教育を加ふるものもあり、又或は研究科を増すとことありて、異宗異様の觀なき能はざるなり。日蓮宗の如きは、小檀林より中檀林を経て大檀林に至り、淨土宗、眞言宗、天台宗、眞宗大谷派の如きは、中學林より直ちに大學林に進み、眞宗本願寺派、曹洞宗の如きは、中學林より、高等學林を経て遂に大學林に達するものにして、更に研究院を置くものについては、眞宗本願寺派、及び同大谷派等あり。一其の細條に亘りて、比較觀察すること等は、之れを他日に譲りて、今は直ちに余が愚案を開陳することとすべし。

余の案は斬新を意とするものにあらずして、實に一齊ならんことを希望するものなり。即ち小學校は尋常高等八個年の全課程を卒業せしめ、其の間家庭若くは寺門において、常に學校教育と相須ちて家庭的教育を授くる中に相當なる宗教的訓育を施すこと、爲し、然る後中學林に入らしむべし。さればこの中學林は世間の中學校若くは現在の宗教中學よりも高等なる程度たらしむべきものにして、恰も現行中學の第三年以上と高等學校の第二年以下を合併したるものに相當せしむべし。

く、この五個年間に於いては、一方よりは宗教家に適切なる一般智識を與へ、他方よりは將來大學に入るの豫備的教育を施すべきなり。而して其の中學林卒業後は、直ちに修業期間三箇年の大學林に進ましむべし。此の間にありては主として宗乘の領悟に務め、併せて之れが活用上に緊要なる諸宗教諸哲學との關係を知悉せしむべきものとす。

之れを要するに、余は宗教學校としての修學年限は大中學合計八個年を期とし、悉皆連續學に就かしめ以て眞正なる宗教家即ち傳道師を養成すべしと爲す者なり。
 尋常小學校四年、高等小學校四年、中學林五年、大學林三年。單に中學林を卒して、學を廢するは、已むを得ざる場合に限り、若し之れありとせんか、唯單に副住職たり副傳道師たるに止むべきなり。然れども余は宗教家として必ず條件的に大學課程を履修せんことを希望する者たり。而して研究院の如きものは、成るべくこれを廢し、皆實地に活動せしめしむべし。若し此の如き研究的性質に富む者あらば、豫め中學林の第三四年を卒えたる後において、官立の高等學校に入り進んで大學に到らしむべく、或は私立の教科大學等に入らしむるも亦可ならん歟。余は畢竟宗教學校が唯一に眞正なる傳道師を輩出せしめんことを以て本務とすべきことを主張して已まざるなり。

愚案の得策たる所以の理由を始め、其の設備に就き、其の學科に就き、其の教授法に就き、其の管理法に就き、尙言ふべきこと許多ありといへども、前來記述せるところの主意よりして、讀者の推察を乞ふ。但し機會あらば、或は細密に諸君の賢慮に問ふことあらん。

其餘、附設事業として、女子教育、貧民教育、孤兒教育の學校の設立整備を要す。然れども、之れ等は宗教教育の本質よりいへば全く例外に屬し、且つ別に世間普通のものに異なるべからざるを以て、此には之れを節略すること、爲せり。
 (未完)

個人に於ける宗教の價值

北村 教 嚴

宗教は個人のためにも必要なり、社會のためにも必要なり、其理由は少なからず、社會のために必要なる所以は、政治教育、風俗習慣、法律經濟等、諸種の方面に關係し隨て其立論複雑なれば、今は暫らく之を措き、先づ個人に就て考察せんと欲す、個人に宗教の必要なることは、大略三の理由に歸するもの、如し、一精神に健康と安慰とを與ふること、二生涯の方向を示すこと、三道德の根底の確定すること、

第一 精神に健康と安慰とを與ふること
 個人は二の屬性より成れり、即ち身體と精神と是れなり、身體は如何にして保存せられ、如何にして成長せらるゝか、衣食住と空氣と運動とに由れり、衣なければ寒暑を防ぐこと能はず、食なければ營養を取ること能はず、家屋なければ雨

露を凌ぐこと能はず、而して如何に衣食住備はると雖も、空氣なければ呼吸を欠き肺の作用を停止せしむ又如何に衣食住あり空氣あるも毫末も運動をなさざれば、體力次第に減衰して終に死に至るべし、以上五のものは、身體の保護發達のために一日も欠くべからざるものなり、其他金銭も必要なり、醫藥も必要なり、學問も必要なり、技藝も必要なり、是等のものは必要には相違なけれども、間接的に必要なるなり。直接的に必要なにあらざり、然らば身體の保護發達のために直接的に必要なもの、衣食住と空氣と運動との五者に限ると見て差支なからん。

一歩進て考察せん、衣食住にも衣食住あり、運動にも運動あり、空氣にも空氣あるべし、如何に必要なるものも、其性質の選擇を誤り、分量其宜しきを得ざる時は却て、其目的を得ること難し、必ず其性質の善惡と、其分量の適否とを熟慮して、吾身體に資せざるべからず、是に於てか衛生の必要起る、衣食住と空氣と運動とをして、其目的を全からしむるものは則ち衛生法なり、衛生法によりて性質の善惡と分量の適否とを鑑別し、取るべきは取り制すべきは制し常に此點に注意して怠らざれば、血氣旺盛筋骨自から逞しく、身體は愈健康に、愈安慰なることを得ん、蓋し人界の幸福是に過ぎたるはなかるべし、

然れども、斯の如きは僅かに個人に於ける半面の幸福に過ぎず、個人全體の幸福にあらず、半面の幸福は完全なる幸福にあらず、完全なる幸福にあらずれば眞誠なる幸福にあらず。

す、個人全體に均等を得て始めて眞誠の幸福となすべきなり、不完全なる幸福は是れ虚偽的幸福なり、無家の幸福なり、然らば何をか眞誠の幸福と云ふ、曰く個人は身體と精神と二の屬性を有す、是を以て身體の健康と安慰とを得ると同じく、精神の健康と安慰とを取るにありと、此兩屬性の幸福を得て始めて完全なる人と稱すべし、而して其本末先後に就ては別に説あり、世人多くは身體の幸福を重して精神の幸福を忘れんとす、斯の如きもの或は評して半身不隨的又た一口に中風の人物と云ふ方面白からん、

身體は有形的屬性なれば、能く注意し易けれども、精神は無形的屬性なれば、等閑に附し易きこと、穴勝無理とは云ふへからず、吾人は是に於て大に宗教の必要を認む、堅固なる信仰確立しあれば、精神愈々健康を得て、異端邪說浮誇曲學の中傷する所とならず、貧苦に迫るも自から安慰と思ひ、水火の難に臨むことあるも不動なることを得へく、迫害に遭ふて一層の勇氣を鼓舞することを得へし、釋迦基督と見るへし、親鸞日蓮と見るべし。

第二、生涯の方向を示すこと。

吾人の此世に處するや、必ず一の目的を有せざるべからず、然れども此世に於ける目的なるものは、或は名譽なるべく、或は榮達なるべく、或は富貴なるべし、此の如き目的は、宇宙の大より遠觀する時は、小中の小なるものなり、終極の目的にあらず、終極の目的は、生死の一大事と決着するにあり、生死の一大事を決着するは、無限絶大の理想による是を以て、

言せば救の人となりたるなり、果して然らば吾人が處世の針路は、此理想に向て進むにあり、政治家は政治家として軍人は軍人として實業家は實業家として、各自其本分を盡しつゝ、理想的生活となすべし、理想的生活をなすには貴賤貧富男女老幼、賢愚強弱の別を見ず、等しく是れ法海一味なり人間の所謂名譽榮達富貴の如きもの、此理想に比せば其に是れ浮雲の如し、何の執着とかなすべけん、去りて是れ等の冀望を全く捨つべしと云ふにあらざり、名譽を望むべし、富貴も望むべし、榮達も望むべし、自から理想中に在りて行動するに於ては如何なる冀望を抱くとも差支なし、理想なきの名譽理想なきの榮達理想なきの富貴は總べて是浮華なり、根底なきの幸福なり、彼の姦佞邪智の徒誦詐を事とし他の利害得失は、敢て顧みず唯自家の利益をのみ期するものは、是れ理想意外に在りて幸福を求むるもの、其終を全ふするもの甚だ稀なり、若し僥倖にして其目的を遂ぐることを得るも斯幸福は總て是れ空夢に異ならず、

人或は云ふ、吾人には善惡邪正の判断力あり、其判断力正常を得ば則ち足れり、何ぞ別に宗教的理想を要せんやと、實に然り、然りと云へども、其判断力なるものは、絶對的に正常なるものなりや、否や頗る覺束なし試みに吾人扁舟に乗して、滄海の中に漂ふことありと假定すべし、然る時は、四面悉く是れ水、聞ゆるものは唯だ濤聲山も見へず、木も見へず、東西南北、固より知るべからず、何の處に向てか進むべき、水路其方向を失ひ、進退是れ窮するならん、彼岸と憶想して、

宗教的生活とは、此理想に向て一致せんとすにあり、宗教の本質も亦た爰に存せり、此理想たるや、或は主觀的に立つるあり、或は客觀的に立つるあり、或は抽象的に立つるあり、或は具體的に立つるあり、之か把柱の方法如何に異なるも、其理想たるに於ては何れも同一なり、吾人此世に處しつゝ此理想に向て行動する時は、一日經過せば一日丈此理想に近くなり、一年經過せば一年丈此理想に近くなり、一生と通して此理想を實現せしめんとすにあり、人世に於ける倫理道德も是によりて最も正確ならしむることを得へし、所謂良心なるもの所謂常識なるもの、彼れ果して如何なるものぞ、理想なきの良心なく、理想なきの常識なし、否な寧ろ理想其ものは或は良心たるべく、或は常識たるべし、然り而して實踐的道德として最も偉力を有するものは宗教的理想に若くはなし、何となれば此理想は常住不滅の實在にして、一切諸現象の依憑するところなればなり、此理想の吾人が心中に現し來りては倫理的實在となり、實踐道德の規範となる、此理想に近づくものは愈善人となり、此理想に遠かるものは愈惡人となる、善惡邪正、迷悟染淨等、此如き區別の生ずる所以は畢竟此點に在り、佛とは何ぞ、此理想に全く一致したるもの、凡夫とは何ぞ、此か向上乃發端に在るもの、菩薩緣覺聲聞皆此が道程にあるもの、階級の名稱なり、吾人が一生は即ち此位置に達する初步にして日々夜々に此理想に向て進歩しつゝ、あることを自覺せざるべからず、此ことを自覺したる時は即ち信仰確立の時にして、既に理想中の人となりたるなり、換

是に向て進むことも、果して成就するや否や頗る覺束なし、斯くして煙波の中に漂ふ間に、長風狂浪の起り來らば、忽にして、水底の藻屑と消ゆ失せなん、豈に笑止の至りならずや、理想なきの生活は、猶方向を失へる舟の如し、心の舵を以て肉體の舟を行き、一世を渡らんとす、豈に理想なくして可ならんや、

第三 道德の根底の確立すること

第三は第二と必然的關係あり、善惡邪正を鑑別し、人生の直路を進まんことを欲せば、其標準の必要なることは固より論を俟たず、其標準たるや、時と處とによりて一定せず、古に善なるもの今必ずしも善ならず、西に正なるもの東に必ず正なること期すべからず、復讐は古代の美德なりしも、現今に於ては蠻行と見做され、奴隸買賣は今日各國の嚴禁するところあるも、古代に於ては大に奨励せられ、忠孝は東洋の尊重する所なるも、西洋には左程大切ならず、吾人の實賤道德の上に、斯の如き差異を生ずるものは、道德の標準の、時と處と異なるに隨て、動搖するによる、又甲の學者の立つる所、乙之を駁し、乙の論者の立つる所、甲之を難す夫れ浮泡の如くに標準の常に轉變する所以のものは、道德の根底を相對界に置くによる、相對界は常に變化して止まらず、此の上に立てたる道德を又た動搖せざるべからず、然れども若し之を絶對界を取れば如何、絶對界は不變の實在なり、遍一切處なり、時間的にも空間的にも常恒なり、確然不動なり、此處より起り來る道德も亦た確然不動なり、勿論之を實現せしむるの方

法に至りては時と處とによりて異なるべしと云へども、道德の本質は終始維然たり、破らんと欲して破ることを能はず、夫れ相對的に作りたるものは、相對的智識を以て毀つことを得ることも、絶對界より現はれ来るものは相對的智識を以て毀つべからず、是に於て宗教的理想は大に有力なることを認識せざるべからず、佛と云ひ、神と云ひ、佛性と云ひ、如來藏心と云ふものは總て是れ絶對的理想なり、此理想に接觸する時は其の非常なる活動力あることを認むべし、此の活動力は、吾人を通じて實現せらるべく之と同時に、吾人は亦た此の活動力を實現せしむべき可能性あることを自覺するに至るものなり、此根底より湧き出る所の精神は、岩石をも打碎く程強きものなり、水火の難を恐れず、豺狼の窟をも避けず、大道坦々として履行すべし、故に吾人は此理想に接觸するを得て、道德の根底此に確立す、

結

余輩は三種の理由を以て、宗教的理想の個人に必要な所を論ぜり、然るに宗教的理想には主觀的なるあり、客觀的なるあり、人格的なるあり、非人格的なるあり、智的なるあり、情的なるあり、何れを取るべきか、是れ重大なる問題なるに似て、左程重大ならず、唯だ各自の縁に一任すれば可なり、敢て勝劣淺深を争ふに及ばず、之を争ふは愚者のなす所なり、絶對不變の本體を把持するの方面異なるによりて、主觀的ともなり客觀的ともなり、人格的ともなり非人格的とも

雜 録

獨乙より

K F 生

次に日本のハイカラ連が、空氣の流通といふことをいひをるが、どうもこいつを日本でやかましく云ふのはちと拘子定義だらうとおもふ、空氣の流通のよいのに越したことはないが、何も日本の家屋にゐてそんなに寒中にばか／＼あけまはすに及ばぬ、第一火鉢の炭が不經濟である、そも／＼こちらをやつが、あんなことを云ふいはれは、まあ、伯林など見ると、窓は二重に硝子戸をしめることになつて居る、此節の様は〇度以下になつてはさうまでせなくては、すう／＼風がはいつて困るからである、そこでどかくこのやつは、窓をあけるのをいやがりよつて、どぢこもるくせがある、これが日本の様に障子で、紙の目から空氣が通ふではなし、硝子で、さちんとして居るから、どうもかうしては風が通はないそれではよくないとかう、衛生先生がうなりだしたのが、もどのおこりで書物にもかきよる、その書物が日本へ傳つた、さあそこで、然り／＼左様御尤と相成て、何でも空氣の流通が

大切だ、寒中でも明ばなして、水ばなをたらずはせにやらなくちやあなせ、とんだことに及んだのです、こいつはこんなな、やかましくいはなくてもよいとおもふ、室の臭氣がしない限り時々にわけたらよいとおもふ。

こちらのやつは、頭が妙だ、男は至極念を入れて、くし目を立て、びかつかせてゐますが、女はもしやくしやの、くしやくで、貧乏神が大風にあはられて、穴倉からとびだした様な髪をしてゐる、これでも、コテで、ちららして、それから一本／＼もどいて、而して後にもしやたり、くしやたりとやるので、なか／＼御念入りのおしこみださうですが、いやはや一向御念入の跡は見えませぬ、とこでこゝに美があるといふからいよ／＼奇です、日本でもちぢれ毛だつたら、母親は涙をこぼして嫁入りのとりこし苦勞をするし、やれ、くせなほしじや、やれ、勢分をつける薬じやと、八百八町をかけたはる位なのに、とんとこではあべこべですから恐入つた、僕のおばがぢぢれ方ですが、いつやらもさういひました「わしがこんな髪じやから、死んだ娘もぢぢれ毛であつた、わるいことは傳り易いものじや、何としてもこれは女としてなさないことじやから、どうかあんなのよめも毛のぢぢれなないものにしたたい」といへるがありますが、それ位に心配しよるのに、こちらのやつは實におかしい、その代りに男は髪がそろつてゐないといふ人の前に出られないとなつてゐる、蓬髪粗髯とあつては、豪傑でもこの國ではもてませぬだ、もんですから、僕は(あながちもてんことを欲するに非ず)五

日前に髪油を購求しました、どうもうるさくてこまりませ、それにふけ性だから、きれいにしやうと思ふとそれは骨です、實に厄介な苦勞をします、ひげは西洋一般三月ごとにそらねばならぬ、これは一向面倒とおもひませぬ、ところが大分面倒がる日本人があつて、それ等は皆下をのびしよる、長岡大佐、芳賀文學士、近角大和尚、池山先生の如きはその類です、髪を凡てのばすことの近角、池山兩氏に採用せられたるところ、如何にその面倒なるかを御察し下さいませ、もウツ西洋に奇なることは、御婦人がちよ／＼鼻の下へひげを蓄へ玉ふことで、尤もこれはをばあせ稱すべき年輩に多きことながら、奇です、變です、男の様にしやんとは參らないけれど、なんだかもしやもしやと墨刷子で、鬚師が夜の間に徒らをした様に出來てゐます、佛蘭西で見た時はウアツトふきだした、何を笑ふのかわからなかつた、見て無事通過しました、こちらにもなか／＼あります、これはこれ婦人は顔を一切そらざる爲におこることです、それも若いうちはおしろいをぬつたり、紅をなすつたりするから、どかくこすり勝の爲に其發生を避けすか、年を寄るととんとそんなことはやらぬからせうと、これは私の想像、こちらの女はどうも(佛蘭西でも)皆早足でちよ／＼とあるさよるそれはなか／＼早いのですよ。

小供は實にうつくしい、愛らしい、奇麗だ、食つたらうまさうな様な顔をしてゐる、して凡て決して人みしりをしな、皆愛嬌がある、實に愛すべきものゝ第一でせう、これには僕

は徹頭徹尾感服しました。それにひきかへて、ババアのでふ
 く〜とふくれ、ふとつたさま（一般にババアは太し）は何た
 かにくい氣持がします。年寄のばばをするのは日本でも随分
 人がにくみますが、こちらの様に物質的にデッブリと相成て
 は實ににくい、にくい、いやなものです。老翁はこれにひき
 かへなかく〜おもしろく愛があります。
 婦人は色が白い、元氣がよい、目が大きい、鼻が高い、口
 のしまつたものが多い様です。これはどうも、せいすらり
 としたところによく相應して、日本の變てこなもの、多いよ
 りはずぐれてゐる様です。この上毛色が黒ければ至極ですが、
 どうもあれがつけませぬ、夫婦の仲は人前ばかり立派で親密
 で、よろしいが、内では噂をん更に勢なさを常とす、僕の今
 ゐる宿で時々めうと喧嘩をやります、犬はくはないでせうが、
 僕の耳にはいるのがうるさいです。どうもかうして見ると、
 よほど夫婦間は變なもので、人の前では大に形式を張つてか
 ら、あ大明神のごとく見せるのです。随分團扇であふひでやる
 位（ことに新婚夫婦は至て甚しけれどそは御さし構へなしと
 してゆるしておきますが）は、やりやすとも、やりやす、靴
 のひもを結ふあり、襟を直してやるありです。時によると、
 見すしらすの男が、女にそんなことを命令されて、はい〜
 とかしこまつて居ることさへありますから、ゆうとは無論の
 ことです。ところが、ここに小供あつて此夫婦に従て、よそ
 へゆくとするとどうもおかしなことに、夫婦は互に手を組
 みやつて、てく〜と自分の足力だけに歩きよる、小供

はふい〜と風にふかれる様に、時々走りては又歩み又
 走るといふ調子、全く何のことはない、小犬がついてゐる様
 なもので、ほんと二人は平氣なもので、おいちやつきなさい
 ます、皆が皆必ずさうでもありませんが、なかく〜あります、
 實に小供の可愛想なこと甚しいことがありますよ、馬車の中
 でも、夫婦は相並んでちやんと腰を掛ける、小供も場があれ
 ばかけるが、さて大人になつてくると、小さい子ならどうか
 まあ膝にのせもしますが、大低は立ん坊を命じます。どうも
 全く小供は無勢力です。そこで多く小供は馬車の天井へ上る
 ことが多い、所謂小供風の子で、本人は何ともない、むしろ
 おもしろいけれども、あたゝかく御夫婦がなかにいるとこ
 ろ、余程妙ですよ、小供がやりばなしにあふところを見れば、
 小犬が妻君の御膝に上りて居る方が、余程果報に見える、又
 實際犬を大事にするのはおかしな様で、何のことはない、我國
 でよく猫妾々が猫を可愛がるのにつくりです、第一おかみ
 の慈悲がありがたいもので、所謂其徳禽獸に及ぶでもないふ
 のです。許さないと、また馬でも犬でも車をどめてやすんでゐる
 ことは許さないと、また馬でも犬でも車をどめてやすんでゐる
 間は、寒中はせなへケツトをかけておけといふ様な法律が
 あるから大變ですよ、犬は皆口に綱をかけてあつて、わんど
 はいつても、がぶりと噛むことは出来ない様にしてあります、
 これも法律に依て定まつて居ます。
 （未完）

佛敎辯士の評判 (五)

自稱辯士

▲渥美契縁先生
 事務家としての先生はまた辯士としても上乘のものに候、
 御親敎復演として三角頭を高座の上に振り立てるの藝當は先
 生特得の長所、殆んど天下の絶品に候、好きこそ物の上手な
 れ、先生幼より辯説を好み、稍や長するに及び御使僧として
 諸國に出張し、老爺老媪の中着錢を奪りしこと幾何なるやを
 知らず候、明治十四五年の比、東京に始めて佛敎演説の開か
 る、や先生また常に其の一員となりて壇上に持前の肩を聳か
 し、其の志を得て一山の樞機を握るに當りても、好きなもの
 は止められず、下僚を以てして事濟むことまで御自身御出馬
 に相成るを常と致候、三十年の改革事件に逐はれて北陸の邊
 限に在るや、はじめの内こそ慎重の態度をも取りたれ、少し
 くほどぼりの醒め来るや、漸く片田舎に落ち着いては居られ
 ず、當面の敵たる石川舜臺の治下に特派布敎使として本山の
 御用を勤め候も畢竟好きな辯説を廢するに忍びざるの致す
 處、此の如く終始辯説の應用を休まざる先生は如何なる方面
 の辯説にも何れぬかりはあらざれども、苛税重斂の説伏は其
 の專賣特許と申すべく候、されば先生の配下、善くいへば財
 政の手腕家、悪くいへば無慈悲の悪人に富むは故なきことに
 あらずと存候、先生老後の野心未だ全く去らず、這回石川舜
 臺を逐ひてせんまど黒幕宰相と成りすまし昨今頗る大得意

の由、先生の爲めに深く惜しみ候、速に位置を後進に譲りて
 深く宗教機關の外に立ち、辯説を以て其の余生を全ふせんこ
 を先生の得策と存候。

▲本多辰次郎先生
 先生の演説は風を切て疾走するの勢なく、岩を噛んで激す
 る水の元氣はこれなく候へども、天麗かに風軟かき春の日
 に、煙草煙ゆらしつ、田舎道を曳き行く荷車の如き趣味は有
 之候四通八達、汽車あり、人力車あり、鐵道馬車あり、ガラ
 クタ馬車あり、自轉車あり、郵便馬車あり、消防車あり、木
 口馬車あり、檢事局送りの馬車あり、高等貸馬車ある東京銀
 座通りの往來には相添はざるの觀あれども、同じ東京にても
 丸の内や、山の手の喧嘩難沓せざる場所を曳き行くには甚だ
 嗜好と存候、平板にして俗耳に入り易く、徒らに無味乾燥な
 る小理屈を並べ立てざるは喜ばしく、歴史談はその専門なる
 だけに最も長所に候、宗教演説、敎育演説、にはよろしく候
 へども、先生がこれより乗り出さんとの希望ありと聞く議會
 の政治演説には稍や、不向と存候、東洋雄辯會あたりに御加
 入相成りて少しこの種の辯説を御練習なされては如何に候
 や



信泉

雜感二則

曉鳥敏

淺間しきは我等なり

我等には好ましき心とてあらぬれど、たまさかに、我ながら驚かれぬる清き心に住することあり。されどこは唯の一念にして、第二念には、このさやかなる清き心を利用して、自ら高くせんとし、自ら誇らんとし、自ら利せんとす。實に淺間しきは我等なるかな。

我等、人を慈むの一念は、實に清らかなり。されどこの一念の清らかなる心の下より、其の慈める人より報酬を得んと欲するの念起り、其の慈める人を利用して自ら得る所あらんとす。實に淺間しきは我等なるかな。

我等、世を憂うるの一念は、實に清淨なり。されど、この清淨の下より、世を憂うるを以て、自ら高くせんとするは汚心萌し、世を憂うる心を賣て、自ら利せんとするの濁念生し來る。實に淺間しきは我等なるかな。

我等、國を思ふの一念は、實に潔白なり。されど、この潔白の心の下より、愛國心を賣て自ら高位を得んとするの念起り愛國を標榜して妄りに異なる者を排せんとするの惡心生し來る。實に淺間しきは我等なるかな。

明日午前には

明日午前には必らず在宅すべければ訪ひ來れど、友の語を信じて、萬事を放棄して、其友を尋ねれば友あらず。留守居の人曰く、主人今朝早く家を出たり、君の來る果して何の用か、訪つれし者曰く、さらば主人は何か云ひ置かざりしか。

留守居の人曰く、「何事もあらず」。かゝる場合に遭遇することある時、常人は直ちに怒る。我等は今迄はかゝる時に怒りぬ。されど仔細に思ひ來れば、我等の怒るは誤されり。我等友の破約を思ひ、友の虚言を思ひ、自己か侮られたるを思ふ時、怒なかるべからず。憤慨なかるべからず。されど、この思想を一轉して、如來今日友をして家に居る能はさらしめ給へりと思ひ、如來今日我をして、友に逢はさらしめ給へりと思ひ、我等に忿怒なく、憤慨なく、心は、すぐに平穩にして、悠々得々として家に歸り來るを得るなり。

常人の苦む境に處して樂むを得るは、精神主義に住して、如來の本務を信する者の被むる利益なりとす。

今昔

本間氏事跡略考

(承前)

菊池秀言

公嚴は本間家累世の宗門所屬真宗大谷派淨福寺第十四世の住職なり、博覽達識内外の典籍窺はざるなし、平安皆川灌園

と友とし善し、灌園及門下某以下數十人公嚴の郷に歸るを送るの詩文現存す、

光丘の作す所皆な誠實より出て遠近齊く傳ふ、此時に方て藩主の内帑缺乏を告げ負債漸く嵩み、財政極て艱む、酒井忠徳公は賢明にして鑑識ありと稱せらる、(珪徳院と號す)光丘を衆士の中より擢て、囑するに財政整理の任務を以す、其知遇に感激して、専心一意斯業に従事す、光丘常に以爲く、國用を足すの道冗費を省て華奢を禁し、贏餘を存して以て不慮に備るに在り、今や國用不足して凶歉若し至らば、何を以てか凍餒を救ふ事を得ん、乃ち明和二年二月郡内に備荒貯蓄用として、親殺二萬俵を八年間に積立て献納せんことを行司に申陳す、許可を得て三郡内八箇處に貯藏を設て毎年之を積蓄し安永四年十二月に至りて既に其年限に滿ち二萬俵を充實すと雖も、前途の豫備として更に四千俵を加て永久不虞の用に備んことを請ふ、其意を慈善に注ぐ精密周到にして、自己の名利を銜はず、一に土地人民の爲に盡せしに至ては唯だ嗟歎の外なし、果せる哉、天明四年以後凶歉荐りに臻る、此貯糧の賑恤に憑て齋庄内領に限て飢餓の民なかりしと云、蓋し明士の恩恵は其謀未萌に出て其德悠久に被るものと謂つへし(此貯糧の剩餘は維新の際償金の使途に充たりと云)光丘の經濟に長したるは天稟に出たるもの、如し、而して銳意勤勉會て藩主より囑せられたる財政、藩士の負債、支藩松嶺酒井家の財務等に至るまで、措置計畫各皆宜を得て、着々其功を奏して名聲藉甚なり、是に於て米澤藩主上杉鷹山公の聞く所となり、

名臣菴戸太華翁を酒田に使せしめ、光丘に就て謀る所あり、意氣投合して屢米澤藩の爲に經濟の援助をせられたる事實は菴戸太華翁と題する書に出たり、

光丘又土木の事に精通せり故に川掛を托せせらるゝを恒とす、貢米置場の破壊修繕及鶴岡、龜崎兩城修理又は將軍家派遣の國目附、駐在の旅館同酒田旅館、或は増上寺塔中に藩主の塋所清光寺を創建し、又は同鶴岡累世の塋所大督寺を修繕せしか如し是也、而して用意周密専ら堅牢を主とす、會て獨立を以て建立せる淨福寺山門の如きは、明治甲午大劇震に際して毫も破壊の痕無りしは、其構造耐震豫防の用意深厚なりしか爲なり、願ふに光丘の生涯は所謂自利々他の事業にして、一世にして其富能く東北に冠たる者、蓋非常の幸運兒たるか如しと雖も、其實は醇乎たる君子の風あり、故に永久の計を其子孫に貽し、藩主及土地人民の爲に拮据經營して多くは其功を奏したり、而て其基く所は皆崇神奉佛の誠心より出て、其踐む所は仁義忠孝の道徳に在り、故に其邸内には七社の祠を建て有名なる山王陵上日枝神社は獨力を以て創造して今に至て修營を怠らず、且眞宗淨福寺山門神宗海晏寺經藏同泉流寺尼公堂等は威獨方を以て經營する所、其他神社佛閣に寄る所の淨財又は毎年額を定て寄する所の供米等に至ては枚舉に遑まわらず光丘の他出する毎に懷中必ず三折念持佛を奉安す、中央は彌陀尊にして、右方は眞宗の開祖眞大師、左方は自家の祖先中興親父の三法名なり、且常に念珠を離さざりしと云、其信仰の堅固なる推て知るへし、故に藩主より重大の事を托せ

らしや、必らず先賢て神明佛陀の加威力を請ひ、而後に着手す、安永八年五月忠徳公光丘を其居間に召て面前に於て手書する文字あり、入三學門、國家安穩、可修也の語、邸内七社祠の額に掲ぐ、主従交誼の渾厚なる忻仰するに耐へたり、公嚴骨て光丘の像に贊して曰く正心奉佛、誠意崇神、神佛冥護、功業維新、富唯潤屋、德已冷民、嗚呼後世誰如、其仁一能、其終生を曲説すと謂へし、現今に至るも其遺業を服膺して神社佛閣に於る消費を壓はず、邸屋内の佛壇及神棚には常燈を献し、淨供物は家長自ら之を配撤し、一族子弟は朝夕先佛檀に禮拜し、次に家長を拜して後各職業に就き忌日には必らず佛參して先塋を拜す、而も己を奉ずる極めて質素儉約にして、家長以下綿服の制を改めず、私利に趨らず、虚名を求めず、政治に黨せず、社交上には信義を重んじ、慈善を好み、毎年窮困の町民へ長期低利の貸與を爲し、凶年饑饉には粥廠を開き、特殊の賑給を行ふを例とす、農業上には地主と佃戸との間親密圓滿にして主僕の關係の如く、又公其上には分に應じて資を捐て辭せず、現に酒田町費の三分の一は毎年之を負担すと云、是の如く家法嚴肅基礎鞏固にして益々榮昌を致すもの、全く光丘養素の遺跡より成る、嗚呼積善餘慶の眞理陰徳陽報の格言古今變する所なし。

(以下次號)

西印度の慘事

西印度の小アンチル島に火山の大噴火あり、四万の人命爲

めに損害されたることは内外の新紙之を報道せり南北亞米利加之相交はる所、一帯の地頸太平洋を抱き、此間に大小數十の島嶼散布す、是れ即ち西印度諸島にして其北部にあるもの概ね大にして之を稱して大アンチル列島と云ひ、其南部に偏するもの多くは小にして之を小アンチル列島と唱ふ、近來米國の爲めに其獨立を得たるキューバ島及び米國の併はず所となりたる、ポートルコの如き皆大アンチル列島に屬し、小アンチルのマルチニーク島は、一時米西戦争の避難地に供用されたるとあり、長さ四十三哩、幅は十二哩より二十哩に至り、面積三百八十方哩、千四百九十三年西班牙人に發見され、千六百三十五年佛國人によりて殖民され、其後英人の有に歸したると三回なりしも、千八百十四年以後より今に至るまで佛國の殖民地たり、氣候は濕氣多く炎熱烈しくして、屢々黄疫の流行あれども、地味は豊饒にて輸出品は重に砂糖、糖蜜、糖酒なり其セントピエールと稱するは、同島最大の都會にて人口二萬(或は二萬八千なりと云ふ)良港に臨み、ナポレオン第一世の配偶たるジョセフ井ーンの誕生地なり、尙ほドミニカ及びセントヴィンセントの兩島も、同じく小アンチル群島の中に其英國に屬し、前者は面積二百九十一方哩後者は百三十二方哩なり、此兩島にも火山は其活動を初めたりと云ふ、元來一列の群島火山系に屬すれば、即ち今回の變を見るに至りたるならんと雖も、一朝にして四萬の生靈を亡ぼすと云ふが如きは、近年稀有の慘事と爲さざるを得ず

分捕事件の無罪

北清事件に關して名譽ある軍人か、銀塊を掠奪したる行爲に對して軍法會議に廻されたることは當時之を報道したるが、此程豫審終結して遂に栗屋大佐以下免訴の言渡を受けたる由、其主意は陸軍刑法上に掠奪を罪とする、明文なきを以て無罪の判決を與へたる事の事なり、名譽ある軍人か無罪となりたるは喜ぶべしと雖も、軍紀の嚴肅は何を以て之を保たんとするか、吾人は固より軍法會議を否認すること能はずと雖、事實聊か疑を挿まざるを得ず、世人も恐くは余輩と同じく此疑惑を水解除すること能はざるべし。

工場法案の立案成る

商工局に於て立案中なりし、工場法案は此頃其編纂を終へ、近日省議に對する由、而して益々本年の議會に提出すべしと云ふ、吾等は可成的完全なる工場法の制定されんことを望む

淺草婦人法話會

去る十日午後一時より全會春季大會を、淺草本願寺に開會せり、初に讀經、次に奏樂、佛敎唱歌あり、下田歌子は開會の趣意を述べ次て岩倉會長挨拶あり、それより南條博士は新法主の乘示を朗讀し了りて町寧に復演し、次に理學士石川成章氏は金剛石の模造品を携へ來りて金剛石と佛敎の妙味とを譬喩を以て巧に述了りて式を終り、一同書院に移りて能狂言

の餘興又は生花盆石等の陳列を參觀し無事散會したるは五時過にして、當日の出席者は千名に近かりしも、流石は婦人の會合の事とて靜肅なりしは、吾等の感服に堪へざる所なりき、新法主の垂示左の如し

婦人法話會員諸子に告ぐ、茲に本日を下して婦人法話會の大會を開くに當り、予は上座して親しく諸子と相見んことを期せしし偶地方巡教の途にありて其意に任ずること能はざるは深く憾とするところなり夫眞宗の教義は人の善惡を問はず機の染淨を擇ばずして善く善くを救済したるは佛の慈悲の心なり其の心を信知しその大願に乘托するのとき我々如來は遍照の光明を以て吾等を攝取し長へに無明の痲團を除きて永く涅槃の妙果を得せしめたまふへしされば此位を正定業不退とは云ふなりこれ予の願次諸子に告げしところ蓋し諸子は此の安心を得て心多歡喜の念に住し報恩謝徳の誠を致さるるなるへし宗祖大師は此の心を「心を弘誓の佛地に樹て佛を離思の法海に流す」とこそ教へたまへり諸子希くは法味を愛樂して現當二世の福益を享受せられむことを今や春將に暮れんとし、懊思に向ふのとき諸子幸に自愛せられよ

教界彙報

- 哲學館の夏期講習會 近來夏期講習會は都部共に行はれ諸科の講習日を追うて盛なるが哲學に關するの講習會は唯東京小石川原町の哲學館に於て開設するものあるのみ、同館は本年も亦來る八月一日より十五日間第二期講習會を開設すといふ、其講習學科左の如し
 - 哲學原理、波多野學士(東洋哲學)石馬學士(倫理學)中島講師(心理學)櫻井學士
 - 凍死追悼會 伊勢桑名郡深谷村獨會發起となり、第八師團第五聯隊凍死軍人の追悼法會を、東西兩派相合して去月同村明光寺にて營みしに、同地の有力者續々參拜され海老原、櫻等の諸氏演説せられ、非常の盛會なりし由
 - 關八州會 同會は大谷派寺院の會にして、來月十五日より二週間淺草本願寺に於て夏期講習會を催し、本講には齋藤唯信師七祖聖教を講ずる由、副講として三四の名士を招聘して種々の學科を講演せしむる云ふ
 - 盲人學校 本派本願寺慈善財團の事業として、盲人學校を設立するの計畫あり、兼て板垣伯に其組織方法調査方を囑託したりしに、此程調査略は了したるを以て彌々右の盲人學校設立の事を内決したる由
 - ダンマバラ氏 印度大菩提會々頭ダンマバラ氏は去る七日東京に入りたるが、都合によれば一ヶ年も滞在するとの事、眞宗大學にては近日同氏を聘し

翠村濱口惠璋氏新著

心靈上の修養

大好評 價金參拾錢
大歡迎 郵税金四錢

散て小六ヶの議論に非ず、煩瑣なる學說に非ず、著者が平素より、能く思ひ、能く信じ、能く感したることを言文一致體に書き述べ、以て心靈上の修養に資せんとしたるもの也。
心靈修養の必要なるは今更ら説くまでもなし、全篇悉く聖親慈の訓言を用ひ來り、親切叮嚀、自己の信仰と互に經緯して一篇をなす、信念の修養に意を注ぐの士は一讀すべし、精神上の慰安を得んと欲する者は一讀すべし、本書は其の好同伴なり大慰藉者也。

翠村濱口惠璋氏著

古英雄と宗教

第三版

定價 金貳拾錢
郵税 金四錢

内容は識者をして之を語らしめよ

○(教海一瀾評) 藤原鎌足以上本朝五十餘の英雄の士が宗教に對する事歴、即ち古英雄が紀傳の一半なる精神的眞象を敘したるもの、此の「古英雄と宗教」てふ一小冊子なり、近代の史冊は彼れが形骸を寫すに努め其方面の記事を具ふるも、彼れが精神即ち其形骸をして此の如く働かしゆるに至り、信致心の如何は措て問はざるに至るは之を史家の罪として叙し、宗教を知らざるの英雄は眞の英雄にあらずと斷するに至り、頗る吾人の同意する所なり、書中一々其人に就て信奉の遺句、或は問歴を掲げ、事毎に之を説明するに力む、文簡なるも義明かなるを期せるもの、如し、(製本美なり)

賣捌所

東京市神田區

東京堂

京都西六條

興教書院

發行所 東京本郷四丁目五番地 文明堂